「烈女」竹中ナミさん

6 日に糸賀一雄さんについて書いた。このレポートの愛読者の一人である卒業生から、早速メールが届いた。メールには同じ日の日経新聞に「障害者が持てる力を発揮できる社会を」と題した表題の記事が載っているとあった。まだ読んでなかったので、すぐに目を通した。この記事で竹中エミさんを知った。

「障害者が持てる力を発揮できる社会を」

日経 6/6

烈女 竹中 ナミさん (66)

「ナミねぇ」。霞が関の年上の男性政治家もこう呼ぶ。金髪メッシュにジーンズ。軽快な関西弁で豪快に笑う。パソコンを使った就労支援をする社会福祉法人「プロップ・ステーション」の理事長だ。「体が不自由でも働いて税金を払い、社会を支える一員に」。思いを形にしようと活動を始めてまもなく25年たつ。転機は出産だった。24歳で産んだ第2子の長女、麻紀さん（42）は重度の心身障害者だ。「この子を連れて、わしが死んだる」。悲観した父がそう言った時、「親子で生きる」と誓った。医師を訪ね歩き、専門書を読みあさったが、障害児を育てるための答えは得られない。娘を抱え、24時間の介護に明け暮れた。

「不幸だと思ったことは一度もない。敷かれたレールを無理して歩かなくても良くなったから」。障害者自身から学ぼうと施設のボランティアに通い、障害者が地域で自立生活する運動に携わった。「私を更生させたのは親でも学校でも警察でもない。娘が大切なことを教えてくれた」と話す。

ネットで検索してみた。竹中さんの「ご挨拶」の最初を紹介したい。－　プロップ・ステーション（略称プロップ）は、ICT（情報コミュニケーション技術）を活用してチャレンジドの自立と社会参画、とくに就労の促進を目標に活動しています。「チャレンジド」というのは最近の米語で、「神から挑戦という課題、あるいはチャンスを与えられた人」を意味し、障害をマイナスとのみ捉えるのでなく、障害を持つゆえに体験する様々な事象を自分自身のため、あるいは社会のためポジティブに生かして行こう、という想いを込めた呼称です。

私は、自分が重症心身障害を持つ娘を授かったことをきっかけに、この 42 年間多くのチャレンジドに出会い、ともに活動して来ましたが、娘が障害を持っていなければ私がこうした活動を始めることはなかったやろうな、と思うと、娘も私も「チャレンジド」といえると思います。

(2015 年 6 月 11 日)